

「行って、あなたも同じようにしなさい」(ルカによる福音書 10 : 37)

2023 年 7 月 1 日 (土)

日本聖公会東京教区 聖オルバン教会 吉松英美

はじめに (話の構成)

1 「聖地ろうあ子どもの里」	- 1 -
(1) 概 況.....	- 1 -
(2) 教育内容と特色.....	- 2 -
(3) 課題は不安定な財政	- 3 -
2 なぜ、ヨルダンか.....	- 3 -
3 日本での聾者を取り囲む状況.....	- 3 -
4 受け入れる社会の成熟が必要.....	- 4 -
5 聖公会エルサレム教区.....	- 5 -
6 ヨルダンという国.....	- 6 -
(1) 概 況.....	- 6 -
(2) 石油に代わる観光立国を目指す	- 6 -
(3) サルト ―「天井のない博物館」構想	- 7 -
7 聖書に描かれた視聴覚障がい者	- 7 -

Control を押しながら項目をクリックすると該当するページに移動します。

1 「聖地ろうあ子どもの里」

(1) 概 況

「聖地ろうあ子どもの里」(The Holy Land Institute for the Deaf, 以下 HLID) は、聖公会エルサレム教区の宣教拠点の一つとして 1964 年にヨルダンの古都サルトに設立された。中東では 4 番目の聾学校である。来年は創立 60 周年を迎える。

3 歳から 18 歳までの児童・生徒 150~200 人が全寮制で生活している。3 歳というのは、受け入れ開始年齢で、全員が 3 歳から入学する訳ではない。子どもたちの多くはヨルダン人であるが、ヨルダン以外の国からきた子どもたちもいる。

教員の多くはヨルダン人の女性である。彼女たちはイスラム教徒であり、顔を除いて、

他は全て足元まで覆っている。

中東では耳の不自由な人が 100 万人いるという。その主な原因は近親結婚だと聞いた。膨大な砂漠の広がる中東は、住むところも移動手段も限られ、よその地域との人的交流も少なく、結婚相手も生活している地域内から選ぶことが多かったと考えられる。

聾学校は、現在、中東全体で 110 校ほどに増えたと聞いている。

（２）教育内容と特色

ここで教える教科は、アラビア語、英語、算数（数学）、社会、理科、音楽、美術からコンピューターの使い方まで普通の学校とほぼ同じ教科を教えている。

卒業後に備えて、男子には自動車修理や金工、木工を、女子には手芸、織物、美術工芸品づくりを身につけさせて社会に送り出している。大学に進学して学位を取り、母校で教員をしている人もいる。職員の中にも卒業生が数人いる。

HLID は、イラクをはじめ、中東各地へ指導者を派遣して、聾学校の教員の研修会を開いている。

聴覚研究所では、難聴の研究や補聴器の開発もしている。手話辞典も編纂した。

「聖地ろうあ子どもの里」は、学校内での教育に止まらず、その知見と研究成果を広く中東全体に還元しているところにその存在意義がある。

「聖地ろうあ子どもの里」を訪問すると、子どもたちを慰めに来たのに、彼らの明るく輝いている目を見ていると、帰る時には、逆に励ましを受けたような気になる。不思議と言えばこれほど不思議なことはない。

手 話

聾学校では、一般に手話を使っている。手話は、しかし、世界共通ではない。国あるいは各地域によって、それぞれ異なる手話を使っている。ここ数年、エスペラント語のような世界共通の手話を作り、普及させようという活動が盛んになり、日本にも世界共通の手話を広げようという運動が起こっている。

食事と栄養

ボランティア活動をしていた時は、子どもたちと一緒に給食を食べた。主食は、インドカレーに出てくる小麦粉で作った「ナン」で、おかずは、野菜の煮物などが出たが、肉と魚、生野菜はなかった。代わりに時々チーズや茹で卵が出た。夏は暑いので、保存上の理由があるのかもしれない。栄養士はいるが、肥満児はいない。

（３）課題は不安定な財政

経営面では、公的援助が不十分なため、国内だけでなく、欧米の企業や団体・個人の寄付や献金に多くを依存している。授業料が払えない保護者も少なくないと聞いた。

わたしたちの支援活動は、2016 年から始まったが、金額よりも、支援の輪がヨーロッパからアジアに広がったことの意味が大きいと聞いた。

数年前のこと、聖公会首座主教会議がヨルダンのアンマンで開催された。会議参加者は最終日に「聖地ろうあ子どもの里」を訪問した。一行が到着して、バスから降りると、校長が植松 誠主教に駆け寄って来てお礼を述べたと、後で植松主教から聞いた。

２ なぜ、ヨルダンか

2000 年代に入って間もない頃、植田仁太郎主教の時に、東京教区とエルサレム教区との間で「姉妹教区」協定が結ばれた。両教区の相互訪問が行われた。

2007 年 4 月にスヘイル・ダワーニ（Suheil Dawani）司祭がエルサレム教区の第 14 代主教に按手された時、植田主教の名代として神崎雄二司祭が按手式に出席した。その時、隣に座ったのが「聖地ろうあ子どもの里」校長のブラザー・アンドリュー（Br. Andrew de Carpentier）であった。

「Come and see」と誘われ、その年の夏、東京教区のパレスチナ訪問団がヨルダンの「聖地ろうあ子どもの里」を訪れ、1 週間ほどボランティア活動を行なった。

以後数回、東京教区からボランティア活動で訪問した。ボランティアといっても、教室の壁の塗り替えとか花壇の手入れ、校庭の樹木の剪定、食堂の清掃などであった。

そのうちに、求められているのは、短期ボランティアではなく、長期の滞在型ボランティアであることがわかった。

実際、自動車修理工場長はスイス人、会議の企画や実施はオランダ人、広報担当はスイス人であった。企画や提案、管理・指導等を担当出来る人材が不足していた。

2014 年に「聖地ろうあ子どもの里」が創立 50 周年を迎え、海外の支援団体を招いて国際会議を開催した。日本からは吉松さち子が参加した。2016 年の第 2 回の国際会議には、吉松さち子と吉松英美が参加した。この時に、日本でも何か支援ができないかと考え、帰国してから、身近な友人・知人に声をかけ、徐々に募金の輪を広げていった。

それから 8 年、支援の輪は、個人から教会や各種団体にまで広がった。始めてから程なくして日本聖公会婦人会（日聖婦）も支援してくれるようになった。

３ 日本での聾者を取り囲む状況

日本での耳の不自由な人は、およそ 23,000 人という。

近年、北海道、京都府、千葉県をはじめ高校などで手話を教える学校が増え、手話コンテストも開かれている。NHK の E テレでは「みんなの手話」や「手話ニュース」を放送している。今年からは選挙の開票速報でも手話を入れるようになった。

大分県のある高校では、卒業式で校歌を手話で歌う光景が NHK テレビのニュースで放送された。秋篠宮家の次女佳子さまが、今年の 3 月 16 日に、茨城県水戸市にある県立水戸聾学校を訪問、生徒たちの生活発表会をお聞きになったあと、手話を使って話し合いをされたことが報道された。

首相や官房長官の記者会見では、左端に手話通訳が立っている。

去年は実際の聾者が主演する映画も制作され、話題になった。

4 受け入れる社会の成熟が必要

聾者が社会に出てからも安心して生きていくためには、社会の理解と彼らを受け入れる仕組みが大事になってくる。

サルトでは、警察官や HLID に出入りする業者、父兄たちが手話を学んでいる。

東京の JR 国立駅構内にある喫茶店では、2 年ほど前から聾者が働いている。客はチャートを見て、指でさして注文をする。私も数回利用したが、不便さは全くない。

この店では、従業員の半数に当たる 15 人が聴覚障害者だという。聾者に対する社会の理解を進めるには、聾者を隠すのではなく、見えるようにすることも大切である。

同じ地球上で、同じ時代に生を受けながら、障害の故に、社会的に“小さくされている”人たちと「共に生きるよろこび」を分かち合うことが大切ではないか。そのために何が出来ることが問われている。

「ルカによる福音書」(10 : 25～) の「^よいサマリア^{じん}人」の中で、イエスは、パリサイ派の律法の専門家に「隣人とは誰か」と聞かれて、エルサレムからエリコへ降る途中で襲われ、怪我をした旅人の話をする。

最初に通りかかった祭司はそのまま通り過ぎていった。次に通りかかったレビ人(びと)は、わざわざ道の向こう側を通り過ぎていった。ところがその次に通りかかった旅人のサマリア人は、その人を憐れに思い、応急手当をしてロバに乗せ、宿屋に連れていった。

イエスは、「この 3 人のうちで、誰が怪我をした人の隣人だと思うか」と聞く。すると律法の専門家は「その人を助けた人です」と答える。そこでイエスはいった。

「行って、あなたも同じようにしなさい。」(「ルカによる福音書」10 : 37)

ここで注意すべきは、「あなたも同じようにしなさい」の前に、「行って」(Go,) と言う言葉をつけていることである。イエスのこの言葉には、「そう思うなら、直ちに行動に移しなさい」という強いメッセージが出ていると思う。

6月11日(日)の福音書(マタイ9:9-13)の13節にも『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい」とある。

ところが両方とも、「どこへ」という目的を表す言葉がない。つまり、ここでの「行って」と言うことばは、「どこかへ行く」という意味よりも、その後が続く「同じようにしなさい」とか、「学びなさい」ということばを強めるための言葉なのだろうと思う。

「福音書」におけるイエスの「動詞」の使い方は、十分研究に値するのではないだろうか。

余談になるが、かつてマラソンに瀬古利彦という人がいた。彼が大学生の頃、陸上競技部のコーチから「聖書を読みなさい」といわれて驚いたという。彼はそれまで聖書を読んだことはなかった。コーチは「聖書には“走る”場面がよく出てくるから勉強になる」といったという。コーチが教えたかったのは、これからは、選手はただ早く走るだけではなく、「人はなぜ走るのか」、「人はどういう時に走るのか」、「そもそも走るとはどういうことか」を考えなさいということだったのだろう。いまでこそ、大学の体育の分野では、「スポーツ心理学」、「スポーツ社会学」とか、さまざまな研究分野が生まれているが、瀬古選手が活躍していた30年も40年も前には、スポーツ界にはそういう研究分野はなかった。瀬古選手はいいコーチに出会ったとわたしは思う。わたしは、「聖書」に出てくる「走る」場面に気がついたことはないが、「聖書」の読み方を考えさせてくれる話として忘れ難い。

5 聖公会エルサレム教区

冒頭で「聖地ろあ子どもの里」は、聖公会エルサレム教区の宣教拠点の一つだと紹介した。そのエルサレム教区は、イスラエル、ヨルダン、シリア、レバノン、そしてパレスチナ自治区の4カ国と一地域をカバーして、信徒数がおおよそ7,000人。教区全体では27教会あるが、そのうち、ヨルダン国内にはアンマン、サルト、北部のイルビッドなどに9教会ある。エルサレム教区の総会など主な会議は、ヨルダンのアンマンで開く。

ヨルダンなら、どの国や地域からも集まり易いからである。

中東には、このほかにキプロス教区、エジプト教区、イラン教区などがあり、4教区併せてエルサレム・中東管区(Province)となる。管区全体では55教会、信徒数は35,000人と言われる。

6 ヨルダンという国

(1) 概 況

ヨルダンは、日本とは時差が 6 時間。飛行機で行くときは、エミレーツ航空で、中東のドバイで乗り換え、ヨルダンのアンマンに行くが、15~18 時間を要する。

面積は日本の 4 分の一。四方をサウジアラビア、イラク、シリア、イスラエル、パレスチナに囲まれ、わずかに南にアカバ湾がある。日本と同じ四季がある。11 月から 3 月くらいまでが雨季である。雨季には雪も降る。それ以外の季節には、雨は降らない。水は大変貴重であり、どこかの家の屋上にも、水を貯めるタンクがある。

人口はほぼ 1,100 万人。東京都民が、本州のほぼ半分の広さの土地に住んでいる勘定になる。そのうち 7 割がいわゆる“難民”と言われている。

1948 年のイスラエル建国宣言によって発生した第一次中東戦争と、1967 年の第三次中東戦争によって発生したパレスチナ難民が最も多く、次いでイラン・イラク戦争や 2011 年に発生したシリア内戦による難民だという。1948 年の第一次中東戦争では、当時パレスチナにいたパレスチナ人 140 万人のうち、実に 70 万人が難民となった。

また、シリア内戦でヨルダンに避難してきたシリア人は、日本の外務省の発表によると、130 万人に上るといふ。ヨルダンとシリアの国境にある二つの検問所にある難民キャンプでは、HLID が、耳の不自由な人たちに、難聴の検査や補聴器の提供をしている他、遊具の提供と手話教育をしている。

ヨルダンは、16 世紀からオスマントルコが支配していたが、第一次世界大戦（1915-1918）でドイツが敗れ、ドイツ側についていたオスマントルコも破れ、1919 年にイギリスの統治下に入った。1946 年にトランス・ヨルダンとして独立。1950 年にヨルダン・ハシェミテ王国と改称した。

現在の元首はアブドラ 2 世・フセイン国王。今年の 4 月に日本を訪れた。

国民のほとんどが、イスラム教徒で、キリスト教徒は 3%程度である。

ヨルダンは、イスラエルと 1994 年に国交を結び、エジプトと並んでアラブ諸国ではイスラエルと国交のある数少ない国であった。今でも、イスラエルとパレスチナ人の間で紛争が起きると、仲介に入るのは、エジプトかヨルダンである。

共和党のトランプ氏が、アメリカ大統領になってから、2020 年に入って、イスラエルと UAE（アラブ首長国連邦）、バハレーン、スーダン、モロッコ各国との国交正常化が進み、中東で、イスラエルと国交のある国は 6 か国になった。

(2) 石油に代わる観光立国を目指す

中東の主な国々は、豊富な石油の産出で潤っているが、その中で、イスラエル、パレ

スチナとヨルダンだけが、陸続きであるにもかかわらず、石油が出ない。わたしはこれを「神のいたずら」ではないかと思っている。埋蔵資源としてはリン鉱石を産出するくらいで、他にこれという産業のないヨルダンは、もっぱら観光立国を目指している。映画「インディ・ジョーンズ」の撮影で一躍有名になった南のペトラ、ローマ軍が建設した遺跡が残る北部のジェラッシ、モーセ終焉の地と言われるネボ山、ヨハネがイエスに洗礼を施したというヨルダン川の洗礼場所。塩分濃度 30 度の死海など沢山あるが、今、ヨルダンで町興しの中心になっているのが、「HLID」のあるサルトである。

（3）サルト ―「天井のない博物館」構想

サルトは歴史が古く、首都機能がアンマンに移行した 1920 年代初めまでは、ヨルダンの中心都市だった。人口は資料によってさまざまで 5～8 万人。山に囲まれた谷間の町である。家家は山にへばりつくように上に伸びている。サルトは昔からイスラエルとヨルダンを結ぶ街道の要衝の地であった。イギリス統治時代の商館や教会、病院など古い建物が多く残っている。ローマ時代の遺跡も発掘されている。

サルトではこれらの古い建物を改修し、ローマ時代の遺跡と合わせて観光の目玉にしようとしている。街全体を「天井のない博物館にする」構想である。

これには先例がある。日本の山口県萩市である。萩市は竹下 登首相時代の「一億創生基金」を活用して、いち早く市全体を「天井のない博物館」にする構想を打ち出した。サルトと萩市は姉妹関係を結び、博物館の学芸員が相互訪問をして連携を深めている。

日本の JAICA の支援を受けている。

「聖地ろうあ子どもの里」の二代目の校長であった Br. Andrew は、オランダ人でアメリカの大学で土木工学を専攻した。彼は 1977 年、レバノンのベイルートに滞在していた時、財政難に陥っていた「HLID」の二代目校長として迎えられた。以来 50 年以上にわたって校長を務め、学校の財政を立て直した。「聖地ろうあ子どもの里」中興の祖といわれる。2017 年に定年退職した後、サルトの町に残って、かねてからやりたかった町興しに関わるようになったが、2020 年 10 月 1 日、古い建物の調査をしていた時に、建物の 3 階の手すりが壊れて転落、死亡した。

7 聖書に描かれた視聴覚障がい者

「福音書」では、目や耳、口の不自由な人たちなど障害を持った人たちはどのように描かれているのだろうか。わたしが調べたところ、重複も含めて 13 ヶ所ほどある。

共観福音書に出てくる事例は、ほとんどが同じようなストーリーである。すなわち、イエスが村に入っていくと、村人が目の見えない人、耳の聞こえない人などをイエスの

前に連れてくる。

イエスが「何をして欲しいのか」と聞くと、「目が見えるようにして欲しい」とか、「耳が聞こえるようにして欲しい」という。するとイエスは、足下の土を唾で捏ねて目の周りに塗った後、「立って歩きなさい」と指示する。

するとその人は、目が見えるようになり、自分で歩けるようになる。また、耳の聞こえない人には、耳に指を入れて、「聞こえるか」と聞くと、その人は「はい、聞こえます」という。イエスは、「あなたの信仰があなたを救った」といって、彼らに「村にかえりなさい。ただし、このことは誰にもいうな」と命じる。

彼らは、村に飛んで帰り、村人たちに一部始終を伝える。イエスの名声はたちどころに村中に広がる。これがおおよそのパターンである。他言するなと言われると、かえって他人に伝えたくなるという人の心理を、イエスはよく知っていた。

では、「信仰があなたを救った」とは、どういうことを指すのであろうか。「福音書」では、説明がない。ただ一つ、わたしの気がついたそれらしい箇所は、「マタイによる福音書」(9:28~30)である。

—イエスが家に入ると、盲人たちがそばに寄って来たので、「私にできると信じるのか」と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりになるように」と言われると、二人は目が見えるようになった。

ここには「信仰があなた方を救った」という表現はないが、イエスの「私にできると信じるのか」という問いかけに、間髪を置かず「はい、主よ」と答えるこのためらいのない応答こそ二人の「信仰の証」なのだろう。イエスは「あなたがたの信じている通りになるように」と言っている。

以上は、「マタイ」、「マルコ」、「ルカ」の共観福音書に描かれた話であるが、「ヨハネによる福音書」にも目の見えない人の話が出ている。

「生まれつきの盲人をいやす」(9:1~)である。

共観福音書とは、描き方に大きな違いが見られる。

—「イエスは通りがかりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯し

たからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるため

である。」

ここでは、まず、イエスと目が見えない人との出会いの仕方が異なっている。

共観福音書では、イエスが村々を宣教していくと、村人たちが、目の見えない人を連れてくる。しかし、「ヨハネ」では、イエス本人が、通りすがりに、生まれつき目の見えない人と出会うことになっている。「生まれつき目の見えない人」という言い方も、共観福音書にはない言い方である。

そして、弟子たちが「生まれつき目が見えないのは、本人あるいは両親が罪を犯したからなのか」と聞くと、イエスは「本人や両親が罪を犯したからではない。神の業がこの人に現れるためである」と答える。「ヨハネによる福音書」の方が、どちらかと言えば、より神学的な問答になっている。

「神の業」は、英語訳では、**the works of God** あるいは **God's works** となっている。辞書には、「神の働き」などと訳されている。イエスを通して「奇跡」という形で示される。「ヨハネによる福音書」にはこのほかにも、たとえば、14：12 などに出てくる。

「ヨハネ」では、共観福音書に出てくる「あなたの信仰があなたを救った」とか、「このことは誰にもいうな」という言葉も出てこない。

それにしても、とわたしは思う。

神の業が現れる、そのことのために、目の目えない人として生まれてくる—そういう運命をどう考えたら良いのか。

NHK の E テレ番組「100 分で名著」で「福音書」について講義している評論家の若松英輔氏は、冒頭で、民藝運動の指導者であった柳 宗悦の「福音書は文字によって読まれてはならないのです。人は字義に囚われるにつれて字義から離れるのです。」という言葉を用いて、「文字をなぞっているだけでは十分ではない。文字だけを追っていると、大きな矛盾に直面する」という。そして「福音書を読むときは、書かれていることを単なる情報として受け止めるのではなく、その奥にあるコトバを深く味わいたいと思います。」という。

みなさんは、普段「福音書」をどうお読みだろうか。これも後ほどお聞かせくだされば、幸いである。